

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

千鶴^{ちづる}は中学一年生。自分のことを、勉強も運動神経も顔も性格もいたって普通の^{ふつう}、平凡^{へいほん}でありふれた女の子だと思っている。そんな千鶴のことを、四つ年上の姉は、いつも安全運転でスピードもスリルもなく絶対脱線^{だっせん}しない鈍行列車^{どんぎょう}（急行や特急に対して、普通電車のこと）タイプだと言う。千鶴はそんな自分をつまらなく思い、変わりたいと強く思うようになっていた。

「かつこいい先輩^{せんぱい}を見つけたから」と、B組の彩葉はバスケット部を選んだ。

「うちのママ、ママさんバレーで全国大会まで行ってるんだ」と、レイミーは遺伝子に賭^かけてバレー部へ仮入部した。

千鶴は次第^{しだい}にあせってきた。いつそ自分もバスケット部かバレー部に、とも思ってたけれど、ともだちのまねではいかにもなさけない。それに、彩葉もレイミーもすでに部活のみんなと結束をかためているようで、そこにはもう自分の入る余地などなさそうな気がする。

陸上部は練習がきびしそう。水泳部は水着がはずかしい。考えるほどに、千鶴は自分にぴたっとくる部活なんてどこにもない気がしてきた。もともと、運動自体、あまり得意ではないのだ。

それでも千鶴が体育系の部活にこだわったのは、「変わりたい」の一心からだ。ここで文化系の部活を選んでしまつたら、このさきもずっと、自分^①はこれまでとおなじレベルの上を走りつづけることになる。

新しいわたし。いままでとはちがうわたし。部活は、そんな自分に生まれ変わる最大のチャンスなのだ。

そう思いながらも、足をふみだす方向が定まらずにいたある日の放課後、吹奏楽部^{すいそうがく}の見学につきあつてほしいと、千鶴はしほりにたのまれた。

「ひとりじゃ行きづらくて。お願い」
「もちろん」

北見二中の音楽室は、本校舎からはなれた別棟の北校舎にある。わたり廊下の窓越しに中庭を見おろしながら進むと、本校舎の喧噪や床の震動が次第に遠のいて、しんとした静けさに包まれていく。

音楽室の戸を開けた瞬間、その静寂をゆさぶる音がした。足もとからはいあがつてくる低音。それがクラリネットの音色であることに、千鶴は室内を見まわしてから気がついた。

クラリネットだけじゃない。机を前方に積みあげてスペースを空けた室内には、想像以上に多くの部員がいた。トランペット。フルート。打楽器。それぞれのパートごとに練習している。部屋の内からひびく多彩な音。その音と音がからみあい、もつれあい、不協和ながらも重層的な音のかたまりを生んでいる。

「見学？」

教室のすみで新入部員の指導をしていた顧問の先生が、千鶴としほりに気がついた。

ベートーヴェンみたいな髪かみの男の先生。でも、顔はあそこまでやばくない。

「あ、はい」

「よろしくお願いします」

あわてて頭をさげたふたりに、「入っておいで」と手まねする。ふたりが足をふみいれるなり、先生はぱんと両手を打って部員たちに呼びかけた。

「一年生が来たから、ちょっと聴かしてやって」

たちまち、パートごとの小さなかたまりがほぐれ、教室の中心に全員が集合した。先生の指揮棒にたぐられて、その大きなかたまりから蒸気のようにメロディが立ちのぼる。最初はふんわりと。ひとつ、またひとつと音が増え、メロディが

ふくらむ。ふくらむ。ふくらむ。ひとりひとりのかなでる楽器が、重なることでその音色を深め、引きたて、美しいハーモニーを育てていく。

砂浜の波が引いたあとで足もとの砂がずっと動くみたいに、千鶴の心は音のほうへと引きよせられた。曲が終わったときにはすっかり感動していた。なんの曲かもわからない。上手な感想だつてひとことも言えなかったけれど、ベートーヴェン先生は「またおいで」と笑ってくれた。

「なんか、すごかったよね」

「うん。すごいよね、吹奏楽部。っていうか、中学生ってすごい！」

「ほんと、レベル高かった。小学校の鼓笛隊なんて目じゃないね」

「目じゃない、目じゃない」

「うちらも練習したらあんなふうになれるのかな」

帰り道、野球部※のときとは打ってかわって、ふたりのテンションは高かった。千鶴の感動がしほりに、しほりの興奮が千鶴にのりうつり、ふたりしてどんどん高まっていくみたいに。

「決めた。あたし、吹奏楽部に入る。千鶴もやろうよ」

しほりに誘われるまでもなく、千鶴の気持ちも吹奏楽部へかたむいていた。

放課後の音楽室にいる自分を、千鶴はたやすく想像できた。すぐに上達するほど器用じゃなくても、まじめに練習を③つんで、着実に成長していく自分。仲間や先輩たちともそれなりにうまくやっていく。ありありとイメージできる。できさる。

「あのね、わたし……中学生になったら、変わりたいって、思ってたんだ」

千鶴は初めてしほりに打ちあけた。

「いままでとはちがう自分になりたくて。吹奏楽部は、すごくいいと思うし、すごくやってみたい。でも、それじゃ、いままでのわたしといっしょって気もして……」

うまく言えない。じれったくだまりこむ千鶴の横顔を、しほりんがじつと見つめている。千鶴が本気するとき、しほりんはいつもおなじくらいの本気で、なにかを返そうとしてくれるのだ。ちよいどいい言葉が見つからないときには、見つかるまでずっとだまつている。

けれど、この日は早かった。

「うん」

胸もとのスカーフをのぞきこむように、しほりんはこくんとうなずいて言ったのだ。

「わかるよ。千鶴の気持ち」

「え」

「あたしも、そんなふうと思うことあるし」

「しほりんも？」

「うん。でも、それでもあたし、千鶴は千鶴らしいことをしたほうがいいと思う」

「そうかな」

「わざと自分らしくないことをするより、千鶴は千鶴らしいことをして、いままでの千鶴以上にそれをがんばって、そのさきに、いままでとちがう千鶴がいるんじゃないのかな」

千鶴は千鶴らしいことをして、いままで以上にそれをがんばって、そのさきに、いままでとちがう千鶴がいる――。

千鶴はその言葉を吸いこんだ。とたん、夕焼け空が朝焼けみたいに光りかたを変えた。

⑤「うん。そうかも。そうならいいな」

すうっと肩から力がぬけた。

「ありがとう、しほりん。わたし、決めた。明日、仮入部届けもって、ヴェンに会いに行くよ」

「あたしもヴェンに会いに行く」

「わたしのヴェンに？」

「あたしのヴェンだよ」

顔を見合わせたふたりの笑いがはじける。いきおいあまつて千鶴が駆けだすと、しほりんが「待てーっ」と追ってきた。

⑥だいぶ足になじんできた通学路にひびく、スタツカートの足音。

ふたりのスカートをなびかす風は、いつしか五月の山吹色に香っていた。

鈍行列車でもかまわない。

わたしはわたしの速度で行こう。

⑦そのさきにはきつと新しい、見たことのない景色が広がっているはず。

〔森絵都『クラスメイツ 前期』〕

※喧噪……物音・人声などがやかましいこと。

※野球部のとき……以前ふたりは、マネージャーにあこがれて野球部の見学に行った。

問一

——線部①「自分はこれまでとおなじレールの上を走りつづけることになる。」とありますが、これはどのようなことを言っているのですか。もっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 今までと同じように、何一つチャレンジすることもないまま、自分のできることや得意なことだけをいかして生活していくこと。

イ 今までと同じように、親がしてくれたレールの上を、踏み外さないように気を付けながら注意深く生活していくこと。

ウ 今までと同じように、普通の、いいことも悪いこともそんなに劇的には起こらない穏やかで平和な生活を送ること。

エ 今までと同じように、苦手な運動を避け、二度と運動に関わることもないまま生活していくことになるということ。

オ 今までと同じように、何においても普通であることを強く意識し、目立たないように平和に学校生活を送ること。

問二

——線部②「すっかり感動していた。」とありますが、千鶴は何のどのようなところに「感動し」たのですか。それが描写されている一文を本文中から探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問三

——線部③「できすぎる。」とありますが、この表現から読み取れる千鶴の心情としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 吹奏楽部で活動する自分の姿をイメージすると、それはとても平和で楽しい時間に思えて安心すると同時に、今までの自分と何も変わらないということに驚いている。

イ 吹奏楽部で楽しそうに活動している自分をイメージすると、それはそれで「普通」で平和な学校生活であると思ひ、自分自身を変えらるることより良いのではないかと迷っている。

ウ あまりにも演奏に感動したため、楽しそうにクラブ活動をする自分の姿が想像できて、ぜひこのクラブに入部したいという気持ちがわきあがってきている。

エ 中学校に入学してから変わりたいとずっと思ってきたが、イメージできるのは、いまままでと同じ自分であることをつまらなく感じ、クラブ見学に来たことを後悔している。

オ イメージできるのは、「そこそこ」「普通」の自分であり、それは今までと同じで自分らしいと思うと同時に、そのイメージに逆らいたいという気持ちが起こっている。

問四

——線部④「しほりんがじっと見つめている。」とありますが、このときのしほりんの心情はどのようなものと考えられますか。もつとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 千鶴が真剣に話し始めていることを承知したうえで、話の途中で言葉が途切れてしまった千鶴の、その後の言葉を待っている。

イ 千鶴が一生懸命伝えようとしている思いを受け止めたうえで、その思いに対してどんな言葉で自分の答えを返そうか考えている。

ウ 千鶴が、しほりんにとって思いがけない内容の話をし始めたので、驚きながらも何を話そうとしているのか気になっている。

エ 千鶴が話し始めた内容が、いつも自分が考えていることと同じであったため、それについて千鶴はどう考えているのか関心を抱いている。

オ 千鶴が精いっぱい何かを伝えようとしていることは分かるが、はっきりしないため、自分なりに内容を理解しようとしている。

問五

——線部⑤「すうつと肩から力がぬけた。」とありますが、このときの千鶴の心情はどのようなものだと考えられますか。具体的に説明しなさい。

問六

——線部⑥「だいぶ足になじんできた通学路にひびく、スタッカート足音。」とありますが、この描写から読み取れる心情を説明しなさい。

問七

——線部⑦「見たことのない景色」とは何を意味していますか。別の言葉で言い換えた表現を、本文中から十字程度で抜き出して答えなさい。

問八

この文章の内容や表現の特徴についての説明としてもつとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 千鶴としほりんが吹奏楽部の見学を通して友情を深めていく様子を、比喻表現や会話文を多用することで、いきいきと描いている。

イ 吹奏楽部の演奏が、それぞれの楽器がかなでる音色を具体的に描写することで臨場感のあるものとなっており、千鶴の感動を効果的に伝える役割を果たしている。

ウ 新しい自分になりたいと思いつづけていた千鶴が、何にチャレンジすれば今までとは違う自分になれるのかに気づくまでを、友人たちとの会話を通して印象的に描写している。

エ 今までの自分から変わりたいと思っていた千鶴が、自分らしさを大切にしていこうと決めるまでの心情の変化を、情景描写や比喻表現を用いて丁寧に描いている。

オ 一文一文が短いことでテンポよく物語が展開しており、そのことが、中学生が悩み、その問題を解決していく場面を効果的に盛り上げている。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

生活文化というものについて考えていると、否応なく見えてくるのが、「伝える」ということそのものの重さです。現代の社会は、^{とほう}途方もなく複雑化し、社会を維持^{いじ}するためにだれがどこで何をしているのか、ひじょうにわかりにくくなつてしまいました。ちゃんと仕事についていても、自分のしていることがほんとうに必要とされていることなどは必ずしも思えないのが実情です。しかし、本来の人間社会は、生きていくために必要な仕事をみんなで分担し、そのための技術や知恵^{ちえ}を次の世代に伝えることで、なんとか成り立っていたはずで、その事情はいまも基本的には変わっていません。ただ、社会の規模が巨大化^{きやうたい}したせいで、必要不可欠な仕事をしている人が見えなくなるとともに、不要不急な仕事をしたり、何もしないでいたりする余裕^{よゆう}が、大幅^{おほはば}に増えたというだけなのです。

「伝える」ということの重さがわかりにくくなったのは、^①「進歩」のせいでもあります。社会を維持していくために何が必要かということ自体は、昔もいまも本質的には変わっていないはずですが、それに使われる技術や知恵は、近代科学の時代になつて、どんどん進歩し、変化するようになってきました。それは結構なことではありますが、「進歩」にばかり目を奪^{うば}われると、結局はそれも「伝える」内容のマイナーチェンジにすぎず、「伝える」こと自体の重みは少しもへつていないのだということを、見失つてしまいかねません。

そのことが大きな矛盾^{むひじゅん}となつて噴き出しているのが、教育の場ではないでしょうか。教育は本来、子ども一人一人の人生のためにあると同時に、^②私たちが次の世代に伝えなくてはならないことを受け渡す場でもあったはずですが、しかし、輝^{かがや}かしい「進歩」に目^めがくらんだ私たちは、教育が「伝える場」「手渡す場」でもあることを忘れ、子どもたち自身がより幸せな人生^{かきせき}を獲得することはばかりを願うようになってしまいました。「なんのために勉強しなくては

いけないのか」という子どもたちの問いに、いまの多くの大人は、「だれのためでもない、おまえ自身のためだ」と答えます。「お国のため」や「一家一族のため」でなくなったのは、おおいに結構なのですが、子どもたちにしてみれば、「自分のためなんだつたら、いやなことはやめておこう」と考えたくもなるというものです。

でも、だれもがそれぞれに何かを「受け継ぐ」こと、そして、いつかはそれを「手渡す」ことが、私たちの社会にとつてどれほど大切であるかが実感できれば、いま、学ぶことを無意味に感じている子どもたちも、少しは意欲を取りもどしてくれるのではないのでしょうか。いまの子どもたちは自分のことしか考えていないんだから、そんなことくらいでは動かない、という意見もありそうですが、人間が無力感におちいり、すべてに無頓着^{むとんちゃく}になるのは、自分が何をやってたつてどうせ無意味だと思わされてしまうからです。自分勝手だと言われがちな現代の若者たちが、ボランティア活動^③になると思ひのほか力を発揮^{はつし}するのが、その何よりの証拠^{しやうこ}です。

しかし、複雑すぎる社会に生きるいまの子どもたちに、どうすれば「伝える」ことの大切さを実感させることができるでしょうか。言葉でただ説明しても、お説教にしかありません。いまあちこちで、伝統技術などを持つておられる方々を学校にマネ^{まね}いて、子どもたちにそれを教えていただくといった試みがなされており、とてもいいことだとは思いますが、ともすると珍^{めづ}しい体験をしたというだけに終わってしまいかねません。子どもたちに学び、実感してほしいのは、たとえば竹トンボを作つたりする技術自体ではなく、^④そういう技術を受け取り、伝えることが、どれほど意味のあることであり、私たちが生きていくために必要不可欠なことなのか、ということです。いったいどうすればそれがわかつてもらえるのでしょうか。

じつはここに、本を読むことのひとつの意味があるのです。考えてみれば、私自身が育つた環境^{かんきやう}だって、もはや「伝える」ことが大切にされている社会ではありませんでした。^⑤シガイ地^{しがい}でしたから、野山で自然に接する機会は少なく、

(d) キセツの行事もすでにほとんどすたれていました。にもかかわらず、暮らしを支える文化というものの全体像がなんとなくわかり、それを伝えることの大切さが身にしみているのは、いろんな国の人々の暮らしを背景にした優れた児童文学、たとえばワイルダーの『大草原の小さな町』や、ド・ヨングの『あらしの前』のような作品を、たつぷりと読んできたからだと思います。読むことはたしかに間接体験にすぎませんが、そのかわり、実体験ではつかみにくい全体像を見渡すことができますし、さまざまな世代、さまざまな立場の登場人物の内側に入って、物事がどう見えているかを知ることができます。それらを通じて私は、自分が生きている社会もまた、基本的にはおなじようにして支えられているのだということを、自然に理解できるようになったのではないかと思うのです。

それに第一、本というのは、「伝えたい」という人間の思いを、イタいほどありありと感じさせてくれるものでもあります。もちろん、すべての本がそうだというのではなく、単なる娯楽として書かれた本、商品として作られた本には、それが感じられないことも多く、そこが本物の本との大きな違いのひとつかもしれません。「伝えたい」とことについても、消えゆく伝統、忘れてほしくない歴史的事件、自分の主義主張や信念などといった、大きなものだけではありません。自分が味わったさまざまな喜び、風景などの美しさ、出会った人々の人間的な魅力、言葉の響きのおもしろさ、食べもののおいしさ、新しい発見の驚き……、たとえ小さなことでも、的確な表現によって「ああ、わかるなあ、これ」と感じさせられるとき、私は、ただそれを受け取ってすまずのではなく、なんらかの形でだれかにそれを手渡さないと、もったいないような気がしてきます。考えてみれば、文化の伝承というのは、なにも義務感にかられて肩肘張ってやることではなく、いいものをもらった喜びをおすわけしたくなるような、そんな小さな思いの集積にほかならないのかもしれない。

本の読み方にもいろいろあって、読書好きのなかには、いやなことだらけの現実を忘れるために、本の世界に浸るという人もいます。それも読書の一面ですが、それだけだとしたら、法律を作つてまで「推進」する必要はないわけで、現にそういう意味の批判もよく耳にします。しかし、ほんとうにすばらしい本は、読む人を自分だけの世界にとじこもらせるのではなく、書き手と読み手とを人間的な共感でつなぎ、何か大切なものを受け取ったことによって開かれた新しい目で、まわりの世界を見直すように促します。かつての生活文化を支えていた人間同士の直接的なつながりが崩壊しつつあるいま、本を媒介として生まれるそうしたつながりは、地球全体にまたがる大きな社会を支える力を育てる上で、ひじょうに重要な意味を持つのではないでしょうか。

(脇 明子『読む力は生きる力』)

※マイナーチェンジ……小さな手直し。

※矛盾……つじつまが合わないこと。

※無頓着……物事を気にかけないこと。

※肩肘張る……緊張して堅苦しい態度をとる。

※法律……二〇〇一年に定められた「子どもの読書活動の推進に関する法律」。

※媒介……二つのものの間に立つてとりもつこと。

問一 線部(a) (e) のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 ～～～線部X「目がくら」む・Y「すたれ」るの本文中の意味としてもっとも適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

X 目がくらむ

ア 何かの光に照らされて、目がくらくらする。

イ 何かにまどわされて、判断力を失う。

ウ 何かに心惹かれて、先の見通しがきかない。

エ 何かにこだわって、何も考えられない。

オ 何かにとらわれて、自分をおさえられない。

Y すたれる

ア 無視される。

イ 価値がなくなる。

ウ 忘れられる。

エ 行われなくなる。

オ 定着しなくなる。

問三 ———線部①『『進歩』のせいでもあります。』とありますが、筆者が考える「進歩」以外の理由を本文中の言葉を用いて十字以内で答えなさい。

問四 ———線部②「私たちが次の世代に伝えなくてはならないこと」とありますが、それはどのようなことですか。これより前の本文中の言葉を用いて答えなさい。

問五 ———線部③「現代の若者たちが、ボランティア活動になると思いのほか力を発揮する」とありますが、それはなぜですか。

問六 ———線部④「そういう技術を受け取り、伝えること」とありますが、このことを端的に言い換えている別の表現をこれより後の本文中から五字で探し、抜き出して答えなさい。

問七 ———線部⑤「本物の本」とありますが、筆者は「本物の本」とはどのような働きをすると考えていますか。本文中から九十字程度で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

(主
意
字
数
こ
削
限
が
あ
る
と
き
は
「
、
一
や
」
。
一
も
一
字
と
し
ま
す
。)

[illegible]

問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
最初					X	(a)
						つて
					Y	(b)
						いて
						(c)
						(d)
						(e)
						い